

第十章 島の来訪者

獄門島唯一の学校、鬼首村立水島第一国民学校の新学期が始まった。高等科に四人、初等科が八人。合計十二人の子供たちに囲まれお能ちゃんおのちゃんの教員生活が始まった。

主に高等科の四人は太湖原校長が教え、初等科はお能ちゃんおのちゃんが教えることになっていたが、五く六歳の子供と十一歳の子供では随分と違う。利点があるとすれば、門前の小僧習わぬ経を読むで、下の学年が上の学年の勉強と一緒に見ているから、まだ教えないのに先に理解していたりすることも多い。

読み書きと勘定ができれば十分が島民の考えだが、学ぶと言うことは自分で興味を持つて取り組むことが重要と考える太湖原長英校長は子供たちの積極性を重視していた。

毎朝の授業は子供たちを全員教室に集めて

「朕惟フニ我力皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ……」

と校長の教育勅語朗読から始まるのだが、毎朝の日課だから初等科の二年生になると意味は解らないまでも文言はそらんじている。新入生の二人とお能ちゃんおのちゃんが流ちょうに暗唱できないので、女先生は新入生じやと男子児童にからかわれていた。

太湖原校長は素読が好きで、お能ちゃんおのちゃんでも意味がよくわからない論語や孔子の大學などを子供たちに暗唱させていた。今は意味なんて分からなくてもいい。ある時突然意味が解る時が来る。それは自分を誤った方向に行かせないための道しるべになる。勉強を教えるんじゃない人を育てるのだが、太湖原校長の教育方針であった。

とつてもそんなふうに見えないがこの人は立派な教育者で、役場や村長が三顧の礼で向かえ入れた理由がわかってきたお能ちゃんおのちゃんであったが、この島独自の平家中心の歴史解釈はどうにも納得いかなかった。それは今まで自分が学んできた歴史観が否定されるからなんだろうが、歴史の授業の時は村の爺さん婆さんが話に來るので授業の手を休められるのが嬉しかった。

文部省の教育指針クソクラエで地域に思い切り密着した学校のため、授業は午前中で終わり、午後からは子供たちは家に帰って家の手伝いをする。これでいいのか？ 学業に支障は？ と悩むこともあったが、とりあえず今はできることをやって少しずつ変えて行こうと考えるようになってきた。お能ちゃんおのちゃんの前任の若い男性教師たちは、この状態に不安を感じ悩んだ末に兵役を志願して島を出て行く連続だった。

午前中で授業が終わると、子供たちは急いで家に帰って家で昼食を食べていた。子供たちが帰るとお能ちゃんおのちゃんも昼飯を食べて翌日の授業の準備をするのだが、そのお昼の時には野々宮今日子と言う新入生がいつも一緒だった。

今日子はこの春父親を亡くし、母親の典子は幼い弟を連れて今治に出稼ぎに出たため、高齢の祖母と二人で暮らしていた。

春、小女子こおなご（こおなご）やキビナゴの漁が始まると島は活気づく。本土では考えられないほど四国では小魚を大量に消費するので、冬の間あまり仕事にならなかつた漁師たちにとっても稼ぎ時になる。

この日、船一杯に小女子こおなごを獲った今日子の父親、野々宮慎太郎は、「もうひと網打った

ら港に帰る」と、仲間を先に帰して一人海に残った。このひと網が命取りだった。船が横転して海に投げ出された今日子の父親は。三日後、現場から十キロ離れた海上に浮かんでいるのを発見された。

今日子が生まれた時、父親は小さい船を買った。その借金を早く返すために無理をしたのが不幸の元だった。高齢の祖母は船に乗って漁に出るようになったので、島の住人たちが協力して交代で弁当を作ることにしたのだ。

家に戻っても誰もいないので、皆が下校した学校でお能ちゃんと一緒に弁当を食べて話をするのが今日子の毎日になっていた。

「校長先生、野々宮今日子ちゃんは野々宮村長と御親戚なんですか？」

今日子が家に帰った後、お能ちゃんは太湖原校長に質問した。

「この村には犬神、野々宮、多治見、一柳しか姓がないからのう。それも皆親戚と言えばそれまでじゃのうもし。」

お能ちゃんが村の名前の読み方が鬼首(おにこうべ)村と知ったのも最近のことであったが、今まで自分が当たり前に思ってきた東京での生活がはたして正しいものだったのか？常識が覆される連続だった。

「女先生いらつしやいますか？」

役場課長の一柳幾蔵の兄で漁師の一柳吉蔵が学校の職員室に手紙と小包を持ってやってきた。今日は今治の港に魚を出しに行ってきた、郵便を預かって来たのだった。校長は吉蔵に職員室に上がるように勧め、お能ちゃんはお茶を出すために給湯室に行った。

「吉蔵さん。魚の相場はどうじゃね。」

「ぼちぼちでんな。尾道の港に出した方が相場がええけど、付き合いもあるしな。ほやけど、軍のおかげでええ思いできよるわ。」

同じ魚でも出荷する港によって値段が変わるので、出荷できるほどの力量がない獄門島の魚は小回りを利して愛媛側と広島側の両方に出している。

「ああ、今日は典子さんが帰ってきたでえ。今治から乗せて来たんじゃ。今日子喜んどうで。今、学校の外ですれ違うたから教えたつた。」

「おお、そりやよかつた。あ、明日は慎太郎さんの葬式か？」

苗院と言うお寺はあつても住職はいないので、年に何度か京都の本山からお坊さんが派遣されてくるのだった。

「今まで苗院担当やつた住職さんが兵隊に取られたから、新しい住職さんが来るみたいじゃて。」

「お寺さんが兵隊に取られる時代になつてもたか、大変じゃのうもし。」

住職と言っても苗院に住むわけではなく、相変わらず三か月に一度程度まわってくるのだが、僧侶側にとって住職と言う肩書を持つことは教団内での扱いが違ってくるため、住んでいる僧侶がいなくても帳簿上住職がいる場合もある。

そんな事情もあつて、若い修行中の僧侶が苗院の住職となって巡回してくるのが通例であつた。

お能ちゃんに届いた小包は弟の武尊君が送ってくれたものだった。愛媛県獄門島鬼首の学校。“これだけのおおぎっぱな住所で郵便が届くのか？”日本の郵便システムはなんて優れて

いるんだ！とお能ちゃんは感激した。

小包の中身は生活用品と本などだったので母親の龍笛さんが箱に入れてくれたのだろうが、郵便局に持つて行つたのは武尊くんだったのだろう。に、してもあいつよくこんな難しい字を書けたな。と弟の成長も感じた。

小包の中に入れていたファッション雑誌、「ゴスロリノン」の表紙に、しばらく休刊することが記されていた。いよいよ戦局が厳しくなってきたのだろうとお能ちゃんは感じた。

記事の内容も”ゴシック・アンド・ロリータ風モンペの着こなしガイド”や”フリル付き竹槍で鬼畜米英におしおきよ”愛国小悪魔ファッションで巡る忠霊塔巡り”など戦争色が濃くなっていた。

当世女子大生の文化が軍靴の音に踏みつけられていくような危機感を感じた。そんな時、こんなおどろおどろしい名前の島で身動きできない自分が時代に置いて行かれるような焦りを感じた。

このおどろおどろしい名前が列挙する島において、ゴスロリファッションを基調にしている自分が一番おどろおどろしいことには気が付いていなかった。

もう一つの手紙は加奈子からのものだったので、宿舎に帰ってから読もうと小包の中にした。

「今治言うたら、雫（しずく）さんが今治の病院に入院しよつてなあ、今朝今治に行つたついでに見舞いに行つたんじゃけど伝染病じゃ言うて会わせてもらせんやつた。」

「雫さん言うたら、犬神筋の人じゃろ。西条の方に嫁いだ人じゃな、もし。」

「犬神右兵衛さんの妹さんじゃな。清助さんが中学校の時下宿していた家じゃな。」

「今年は犬神祭りにも来てなかつたな。あかんのか？」

「そない大した病気じゃないらしいけど、伝染病じゃて。ほんで月野さんがおつてなあ。これ預かつて来たんや。後で弟と相談してみてつかあさい。」

犬神家、伝染病、謎の荷物。何か恐ろしいことが起きるような期待をするお能ちゃんであつた。

今治は鶏肉が名産で全国展開を目指していた。そのため、全国公募で今治の鶏肉を有名にする案を募集した。千葉のポンチ絵描きのコウチャンと言う人が今というキャラクターデザインしたイラストが入選したのだった。バリイさんがゆるキャラになるはるかに前の時代である。名前は徳島のおねえちゃんの命名で「トットさん」と決まった。

今治は鶏肉の一大拠点として産業を起こそうとしているが、時代は獣医不足。それなら、獣医専門学校を誘致しようじゃないかと県知事が動いていたら、隣の讃岐の議員から待たがかけられてしまった。四国にうどんを越える名物を作らせたくない妬みと、玉金と言う議員の功名心が大きな混乱を起こしているのだった。

島出身の月野雫（しずく）さんは島の女性たちの内職仕事にと、繭を使ってトットさん人形を考案し、島の生活が豊かになればと見本を作ったところで伝染病に倒れてしまった。

余談ではあるが、家畜法定伝染病にブルセラ病と言うのがある。この病気にかかった牛は

女子高生のセーラー服や下着に異様な興味を示すようなことはなく、体力が衰え脳炎などを発症するのだが、この感染症は人間にも発症することがある。人間の場合、女子高生のセーラー服や下着に異様な興味を示すようなことはなく、牛と同じ衰弱症状になるのだが、第二次大戦中に生物兵器として研究されたことがあった。日本では1970年代に根絶しているが、近年、輸入された犬から発見されることが多く、この病気に感染した犬が数パーセントいるらしい。そういう意味で獣医の重要性は非常に高いのです。

校長と吉蔵はトットさん人形の見本を持って役場に行き、お能ちゃんは宿舎に戻って加奈子からの手紙を開封した。

それはたぶん加奈子が松山座公演に行く前に書かれたもので、与一君を追いかけ大陸に渡る決心をしたと書かれていた。もし、この島に来た新任教師が加奈子だったら？ 幼児教育に関わりたかった加奈子が一番望んでいた場所に自分がいることへの後ろめたさを感じた。でも、この村の奇妙な人たちと渡り合えるのは自分だけだろうとお能ちゃんは思った。

消印から十日も経っている手紙だった。一途な加奈子のことだ、もう日本にはいないかもしれないとお能ちゃんは感じていた。

その頃、獄門島の港に巡回診療船が着岸した。明後日に学校の検診と予防接種があるので明日あたり入港するものと思っていたら、一日早く船が到着したのだった。

お能ちゃんも港に行ってみると、まだ若い頼りなさそうな医師が船から下りていて、船のロープを括り付けるブイにもたれて吐いていた。

「医者を、医者を呼んでくれ。」

「あんたが医者だろ！」と皆に思われていたことは受けあい。かなり重度の船酔いらしく、あおむけになったまま眼球が前後左右に揺れていた。

「ダメだこりゃ。」

声に振り返ると、聴診器を首にかけたナースのほおでえさんが仁王立ちしていた。

「新任の先生連れてきたんやけど、行く先行く先こんザマじゃ仕事にならんぞな。」

白衣のポケットに両手を突っ込みながら

「まっこと使いもんにならんぜよ！」

とどこだけ土佐弁で言った。

「私の出番でしょうか？」

ほおでえさんの背後には法衣姿の僧侶が立っていた。

「あんまり頼りない先生じゃけん、坊さんも連れて来たぞな。」

ほおでえさんの言葉に周りにいた人たちもこらえていた笑いが噴き出してしまった。

村の若い衆が番小屋から戸板を持ってきた。本当は、海に水死体などが上がった時に搬送に使うものだったが、診療船に担架が積まれていることなど誰も気が付かなかった。

「湖東先生、こん板の上に乗りんさい。」

医者や戸板に乘せられて、臨時診療所にもなる番小屋まで運ばれた。

法衣の僧侶は葬儀のために来た巡回の僧侶で帰依(きえ)さんと言う尼僧だった。

「この度京都の本山より苗院の住職を拜命した帰依と申します。至らぬこともあろうかと思いますが、よろしくお願ひします。」
と、港に集まった島民に挨拶をした。

「よういらつしやつた。新しいおじゅつさま(院主様)かね。電信が入つとりますけん、まずは役場へどうぞ。村長も待つとるけん。」

役場の一柳課長は番小屋に隣接する役場兼郵便局の庁舎に帰依住職を案内した。

番小屋ではいくらか体調調が回復した湖東医師が椅子に腰かけ、お湯をもらつて飲んでいた。湖東医師は岡山医科大学を出たばかりで、松山の病院に外科医として来たところ、巡回医療船に医師として乗り込むことになってしまった。滋賀県の出身で琵琶湖はあったものの船に乗ったことがなく、行く先行く先で酔いのために迷惑をかけていた。

あまりにも船に弱いので医薬品をとり立ち寄った広島の病院に交代要員を求めたが、あいにくの人手不足でまた船に戻されてしまった。その時、港で獄門島に渡る帰依住職に出会い乗せてきたのだ。

一ヶ月の半分を巡回診療船で、残りの半分を松山の病院に勤務しているほおでえ看護師は実質的な診療船の船長兼院長のようなもので、診療船に乗り込む医師の多くは未熟なタケノコ医者や現役を退いた年輩の医師だったため、島々の住人の健康を一番よく把握しているのはほおでえ看護師だった。

診療船は時として急病人がいる島に急行することもあるので、船の動力などが強化されていた。今で言うならドクターヘリのような役目も担っていた。

中島飛行機のエンジンの専門家、千葉の宵宵先生が開発した水平対向四気筒のターボエンジンに6速MTを搭載。船体はフルカワ先生が水力抵抗を徹底的に抑え、船尾にはスポイラー装着、どこに使うのかわからないけど、ビスカスカップリング付きセンターデフ、ビルシユタイン倒立ダンパーやブレンボのブレーキも装備していた。船名も「昴(スバル)丸」で、船体の赤十字マークの横にはWRXと書かれていた。

この船でマツダの本拠地広島に行くのは勇気がいると思ふ。

船舶免許を持つほおでえ看護師が海原をドリフト走行しながらかつ飛んで来たので、ただでさえ酔いする湖東医師は卒倒してしまったのだ。

合同庁舎から出てきた野々宮村長と帰依住職は苗院坂を上つてお寺へと向かった。ほおでえ看護師とまだ幼さが残る見習看護師と船長は船から医療道具を番小屋に運び込んだ。

合同庁舎から出てきた一柳課長は

「先生も動けるようになったら、本陣に行つて休んでください。」

と湖東医師に声をかけた。まだ椅子に腰かけ頭をうなだれたままで、顔も上げることができないような状態だった。

「課長さん、この島は弘法大師にゆかりの島って聞いていたけど、今の和尚さん、真言宗ではなく浄土真宗みたいですね。」

と、お能ちゃんが訪ねると、

「おお、よく気が付きなすつた。この島は親鸞聖人にもゆかりの島なんじゃ。」

と一柳は手を叩いて話をつづけた。

「村の歴史書によるとじゃ、越後に流罪になった親鸞聖人はその前にこん島に来て教えを説いて旅に出たんじゃな。そして、親鸞聖人にお供して旅に出たのが犬神家の娘。それが恵信尼さまじゃ。法然上人も土佐に流罪になつとるし、弘法大師様も出とる。秋山兄弟も愛媛じゃ。ホンマに四国は素晴らげなとこじゃ。」

そんな話聞いたことないぞ！と思うお能ちゃんだったが、最近は慣れてきた。

「役行者(えんのぎょうじゃ)も立ち寄ったかもしれないですね。」
と茶化したつもりが、

「おお。よう気がついたぞなもし！役小役(えんのおづぬ)がこの島に修行に来たら嘖き出したのが、わしらが毎日飲んでる”行者の泉”の水じゃがなもし。おかげで島にはこがいぎょうさんの人が住めるようになったのじゃ。」

一柳課長がお能ちゃんに熱く歴史を語っている頃、帰依住職と校長は苗院にいた。

庫裏には神戸から療養のためにこの島に棲みついている横溝先生が住んでおり、年に何回か巡回で来る住職のために本堂の掃除は行き届いていた。

「菩薩戒弟子 鄆城夏蓮居法名慈濟会集各譯敬分章次(ぼさつかいでしゅうんじょうかれんきよほうみょうじさいえじゅうかくやくきょうふんしょうし)……」

帰依住職は阿弥陀菩薩の安置された須弥壇に向かい、無量寿経(むりょうじゆききょう)を読み始め、野々宮村長と横溝先生と檀家総代の犬神右兵衛も本堂に正座して読経をした。犬神右兵衛は犬神神社の神主でありながら苗院の檀家総代でもあった。

まづい！この人たち、お経をそらんじている。帰依住職はただならぬ背後から響く読経の声に驚いた。お寺に常駐してくれる住職がないから、島民が亡くなると住職が来る本葬までに埋葬してしまうため、自分たちで念仏唱えてお経を読んでもう島民たちだった。

「帰命無量寿如来南無不可思議光(きみやうむりょうじゆによらいなむふかしぎ)う……」

正信偈(しょうしんげ)を読みはじめていると、帰依住職の目の前を二本の足がパタパタ通り過ぎて行った。子供の足首でくるぶしの少し上あたりまで見えたけれど、そこから上は何もなかった。

まづい！このお寺には何かいる！と背中にとんとするものを感じた。

それでもここであらたえては名折れになるから、何事もなかったようにお経を読み上げ、終わった時には額に汗が噴き出していた。

一生懸命にお経をあげて下さったと村長も犬神右兵衛もたいそう喜んで

「尼様にお経読んでもらうのは初めてですが、いい読経でした。」

と絶賛され、

「お粗末様でした。」

と、下げた頭を持ち上げた時、帰依住職は息をのんだ。こんどは髪の毛が真っ白で、全く同じ顔をした老婆が二人、村長たちの後ろに座っていた。

帰依住職は汗で曇った眼鏡を手拭いで拭いて、もう一度かけ直したら……やっぱいる。

村長も犬神さんも横溝先生も真後ろにいる老婆を気にしている気配もない。

”私も兵役に応募しようかなあ”帰依住職は思った。年齢制限でアウトだけど。

「おお、そうじゃったおじゆつさま。こちらは八墓の墓守をしている多治見家のお金さんとお銀さんじゃな、もし。島一番の年寄りの双子の姉妹や。」

ああ、普通の人間だったと帰依住職はほつとした。同時に毒々しい地名に惑わされていた自分が未熟だと反省した。ちなみに、最初に見た足首だけはこの島に該当者はいないので、ここの世界じゃないと思います！

横溝先生が本堂までお茶を持って来てくれ、やつと一息つけると安堵した帰依住職に、お金さんとお銀さんが話しかけた。

「院主様はどちらから来なすったね。」

「名古屋でございます。」

と帰依住職が答えると、

「名古屋つてのは博多の隣じゃな。」

「そうじゃ、満州の首都じゃ。坂本龍馬が治めておる。」

「織田信長はおらんのか？」

「織田信長は日露戦争が終わって徳川家康になったんじや。学校で教わらなかったか？」

「そんな昔の話憶えてないわい。」

啞然とする帰依住職に村長が耳打ちした。

「ちいつとボケてるけん、気にせんといてつかさあい。」

帰依住職はうなづいてお茶を口にしてしていると、

「ところで院主様はどちらから来なすったね。」

「名古屋でございます。」

話は振出しに戻るのであった。

ようやく歩けるようになった湖東医師に付き添ってお能ちゃんとおほでえ看護師は苗院坂の下の旅籠・本陣にたどり着いた。

「お能ちゃんはこの島に慣れたかのう？」

「いろいろ勉強になることが多いです。」

「それならええけど、不便なことも多かろう。」

「ところで、今日来た住職さん、こちらに住むんですか？」

「一週間ほどいたら名古屋に帰るみたいやで。」

「名古屋からいらしたんですか。」

お能ちゃんは多治見家でのお金さんとお銀さんとの会話を思い出した。その時、苗院ではリアルタイムでおなじみのやり取りが繰り返されていた。

「よう来なすった婦長さん。こちらが今回の当番のお医者さんかね。」

旅籠・本陣の野々宮与六が巡回診療船の一行を出迎えた。

「船長さんと見習さんはもう部屋に入ってますけん。それより、犬神の雫さんがたいそうな病しよったようじやな。」

「まだ会ってないけんようわからんが、水疱瘡じゃ言うたよ。」

「水疱瘡？子供がかかるあの水疱瘡？」

「大人になって患うと痛うて長引いて大変なんじや。」

「雫さんは犬神家の箱入りじゃったけんろう。」
旅籠・本陣の主の野々宮与六は腕組みをした。

お能ちゃんはほおでえさんの部屋に行つて村の話をしていると、苗院でのお務めを終えて帰依住職が旅籠・本陣に戻つてきた。

「どうじゃった？お寺の様子は。」

帰依住職はお寺で起きたことのいきさつを話すと、

「こん村の人はちよつと異なる常識もつとるけんろう。悪気は全くない人達じゃけん悪う受けとめんでのう。」

でも、さすがに歩く足首のことだけは話せなかった。

帰依住職も来島早々この島の歴史観に戸惑つていた。親鸞聖人来島説である。

親鸞聖人の妻となつた恵信尼はこの出身かはつきりはしていないものの、新潟の人だと常識的に教わつていた帰依住職だが、恵信尼が犬神家の娘で、この度、尼僧の帰依住職が苗院の住職となつたことに「恵信尼さまのご縁じゃ」と犬神右兵衛はじめ、島民が大喜びしていることに、どう教化したら良いものか言葉が出なくなつてしまった。

「上手に受け流して、逆らわないことにしたの。」

お能ちゃんの言葉に気が楽になる帰依住職だった。

帰依住職にはお能ちゃんと武尊君と同じ年の娘と息子がいることや、ほおでえ看護師の夫は松山の病院に勤める医師であることなど話しているうちにランプに火を灯す頃になつて来た。

お能ちゃんはいつも本陣の温泉でもらい湯して、夕食もここで食べているのだが、一度宿舎に戻つて着替えてくることにした。

ほおでえ看護師と帰依さんは温泉に行った。

「ここはどこ？以前見たことあるような。」

岡山の中岡三世料理店で広東にはない広東麵と、天津にはない天津丼を食べて力を付け、今回はボートを借りて鬼が島に向かったが、潮の流れに流されてまた悪霊島の岸壁に漂着してしまつた秋田のネロさんだった。

